教室に住み着いた悪魔

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
教室に住み着いた悪魔

【Ｎコード】
Ｎ６６８３Ｒ

【作者名】
麒麟

【あらすじ】
元不良少女メリサは、中学校に入りマトモな生活を送ろうとしていたしかし、そこで悪魔を見る。その悪魔は言った。
「この学級は、間違いなく崩壊する」と。メリサは、いじわる女子軍団と戦いながら、学級崩壊を防ぐことは出来るのか？
常にメリサをサポートするのは、教室にいる精霊やモンスター。口うるさい担任を巻いてくれる精鋭部隊だ。こんな感じで面白可笑しく学校生活を描いてみました。

プロローグ（前書き）

短編小説と被ってしまっています。というのも、連載小説と選択するのを間違えてしまったからです。

プロローグ

私は、中学生になった。私は、メリサ。小六の後半は不良になっていた。一応、でしゃばりの素質があったのか児童会役員をやっていたが……担任の説得が功を奏したか、毒舌を封印し学校に向かった。家から学校までは余りにも近い。ベランダから、学校の様子を伺うこともできた。私は、よくいう「新たな期待と不安を胸に」というのは全く無い。転勤を繰り返した私には、別の学校の人達がいるのは違和感ないし、友達も簡単に作れる。何しろ、全員別の学校の人という環境に立たされてきたわけだし、新しい決まりというのも、すぐ馴染める。間違って面倒なことになっても、うまくやり過ごす方法は心得ていた。

やはり、私は遅刻ぎみ。家が近い人ほど油断して遅くなりやすい。別に遅れているわけではない。全然問題ない。そこらの女子が固まって「そんなに遅いと先輩に目つけられるよ」とかイロイロ言われたが、気にするほどでない。私ほど遅く来ている先輩は少ない。つまりは見ている人もいない。席は左後ろ。五人で一つの班を組み、六つの班がある。前二人、後ろ三人で構成された班は出席番号順に並んでいる。クラス全体で三十人。今年度だけ、試験的に少人数でのクラス編成が行われた。

席は、三人の真ん中……つらい。右隣はどうやら、さっきやいやい言ってきたグループの首領（ドン）らしき人物。左隣は、小五で同じクラスになり、児童会役員でも同じだった男子だ。

さて、女子の話に全く興味も無く、ついて行けない私は、しばし彼女らのイジメの標的になる事が多い。いつもなら、自慢の毒舌で、何発でもお見舞いしていたが、今回はそうはいかない。小六の担任が「このままだと確実に腐る。中学校でやっていけない」と口うるさく言われたので、今畜生あのデブ野郎の言った通りになってたまるか。という思いでやってきた。つまりは、ぶん殴るも毒舌も無し。

かと言って御機嫌伺いする気にも全くならない。ということは、私お気に入りの友達作り法が役に立つ。何をするかって？　単純だ。自分の好きな事をやってればいい。私の場合は、小説を書くことだ。するとどうなるか、友達を作りたい皆と仲良くしたいという素晴らしい心の持ち主、又は類は友を呼ぶというように無理して仲良くする必要のない気の合う人達が集まってくるのだ。逆に鬱陶しい連中は来なくなる。

まあ、こんな面倒くさがりで適当な私であった。しかし、ある瞬間を境にこの態度は消えることになる。

「おい、聞こえてんのか？　おーい」

私の耳に響いたイタズラっぽい声。人間らしくない、扇風機の前で声を出したときのような音色。

「フン、いつのまにか目が曇ったな」

何故か、感覚的に後ろの掃除ロッカーを振りかえる。人間はサルだったころの野生の本能みたいなのを残しているのだろうか。こういう気配を感じることがある。そして、その気配の張本人は人間ではなかった。

黒く人間の膝までしかない小さな体。二本の角は少しうねって後ろに突き出ている。典型的な悪魔の姿をしていて、背中にはコウモリ羽までついていたが、飛べそうにない。

「誰？」

思わず聞いていた。もとからファンタジーが大好きな私は、悪魔が人語を喋ることもあると聞いていた。

「オレ？　ここの教室に住み着いた悪魔さ」

イタズラっぽい笑顔を浮かべている。奴らを信用ならない。私はもう一つ聞いてみた。

「いつのまにか、と言ったな。お前私の過去でも知ってるのか？」

「まさか、でもアンタには、魔法の跡がついている。オレら魔物にはわかるさ。オレらを信じて真理をつきとめた者だけが持つ印さ。だが、アンタはそれを捨てた。違うか？オレらの見える世界を」

その通りだ。転校して、ここの学校がファンタジーを嫌うことをいやという程知らしめられた私は、転校生らしく、郷に入っては郷に従えの習慣にならった。そして、伝説と呼ばれる真実を手放した。あの楽しい仲間を。

「だろ、やっと話になる奴が来たと思ってな。オレはアンタに言いたい事があるんだ」

悪魔がニヤリと笑う。

「この学級は、間違いなく崩壊する」

入学

学級崩壊。その言葉は私の胸にどんとのしかかった。学級崩壊の有様を私は二回も見た。いや、居合わせたことがある。

ここで、恐縮ながら、私の変遷を語らせていただく。最初国立の小学校に受かって大活躍。有頂天の私は、入ってまだ半年。つまり、一年生の秋に転校する。そして、その学校はなんと不良というか、暴力の塊のような場所だった。その学校の二年生で学級崩壊を味わった。味はって？　マズイに決まってるだろ。暴力になれた奴ならいいけど、国立にいたお硬い頭の人がそんな現実簡単には受け入れられない。二回目の学級崩壊は、五年生の時に転校して来たモデル校という優等生気取りの（正直バカって思う奴が多い）学校で起こった。六年生のときだ。あのマズイ味を知った私がなぜか主謀者になっていた。

「ふふん、止めたいなら、この学校の伝説を調べるといいね」

悪魔を姿を消した。

私は、机をノックするように叩いた。ホワホワーンと出てきたのは黄色い犬。ランプのジンのように腕（足）組みして、後ろ足は細くなって消えている。左側の八重歯が可愛らしい。

「何の用だい？」

そこまで言うと、犬の精はめを細めて私を見た。

「ほおー。魔法の印持ちか。おい、みんな学校創立以来初の勇者だ！」

何で？　私はツッコミたかった。次々に教室の至る所から精霊やモンスターが顔をだす。

「だから、魔法の印を持った人間がこの学校に入学したのが創立以来初なの」

なに！？　私の前の学校はほぼ全員見えたぞ。しかし、この考え方は転校生としては、不適合だと思い出す。学校によってガラリ事情

が変わるのは当たり前。それにしても、創立二十年ちょいあって未だに彼らを見た生徒がいないとはなかなかすごい。
「で、勇者って言いすぎじゃない？」
「何言ってんだ。お前もあの悪魔見たんだろ。あいつは凄いぞ。二十年に一度現れるようになった悪魔の親玉っていうところだ」
もっと説明しろと目で要求すると
「ああ、胡散くせえ。もう入学式に並んでるぜ」
本当だ。私は急いで廊下に出た。入学式には出席番号順で並ぶ。私の前も後ろも男子だ。内心良かったと思った。女子だと喋り声がうるさい上に、機嫌が悪いと、とばっちりを食らう。しかし二人とも私の班にはいない。男子と女子の数の問題で私の班とは同じにはならなかったようだ。そして、二列並びで隣も男子。
「行くよー」
誰かの合図が聞え、出発した。と言ってもすぐに渋滞して止まったが。さあ、この間に情報収集だ。辺を見回して精霊を探す。いた。ウサギのような顔のコウモリがこちらを見ていた。シャイなのかそっぽを向いた。
「ねえ」
コウモリの精霊は飛び上がってビックリした。
「やっぱり……なんだね。うん、そうだと思ったよ」
「この学校の伝説って知ってる？」
「もちろん。でも、自分で探さなきゃいけないんだ。勇者にそれを教えていいやつは決まってるのよ」

学校探険×伝説探し

全く、昨日は忙しかった。入学式は無事に終わったものの、担任が最悪。私は、担任発表を聞いた瞬間青くなっていたと思う。

「一年四組担当、メルバーグ」

ボタンが弾けんばかりの巨体を揺らして登場した担任。顎までダボダボの肉がくっついている。二年連続デブかああ！！！！！！！！！！！！

しかも、さらに最悪なことに、私の名前の綴りは、Ｍｅｒｉｓａで、メルバーグはｍｅｒｂｕｒｇ。最初の三文字が被っている。読みが違ったことが唯一の救い。憧れの人と共通点があると嬉しいものだが、こういう尊敬できない人と共通点があると、辛いものだ。

その後、あった事は、私の席が端っこの移動しただけで、特に何もなかった。

そして今日、入学早々憂鬱な気分で学校へ歩を進める私。絶対いい事なんて無い。今日は軽ーく学校探険をするらしい。あと、身体測定もだ。来月始めには一泊二日の合宿がある。うげー集団行動って最悪。大概、行き詰ってキレイゴトでどうにかしようとする。自分勝手な奴が、他の人に向かって「ジコチュー」と叫ぶ。これだから、学校って嫌になるんだ。

朝の会が終わって一時間目が始まった。学活。今日の学校探険と身体測定の説明が行われている。一時間目の途中から身体測定は始まり、学校探険はその余りの時間で班ごとに行われる。組織も決まらない中、身体測定は男女別で進め、大波乱が予想される。朝の会の時に、代表で全員を誘導する人を決めたのだが、成り行きで私がやることになった。もちろん、目的は、先生の性格さぐり、あと印象を良くして保険をつけておくこと、伝説を探る機会を作る事。そして、鬱陶しい奴らから逃げること。

先生の性格は、もう最悪としか言いようがなく、これからもずっ

と言い続けるだろうから、今回は書かないでおく。本題はこれから、私が最初に出会った伝説は、会議室で起こった。
一階の職員室の奥にある部屋。この隣の部屋で聴力検査があるのだが、私は何となーく伝説の雰囲気に惹かれて会議室を除いた。
「やっと来たね」
ロの字に並べられた机の中心に座り込んだ鳥のようなモンスター。白い体、くちばしが馬鹿でかい。
「伝説を探しに来たんだろ。教えてやるよ。ただし、君は先生にバレないように、このまま先へ進むんだ。僕の声は遠くに行っても聞こえるからね。でも、振り向いたりするのはＮＧ。そういう精神力の無いやつは僕らを危機に陥れるからね。僕が試させてもらうよ」
私は奴の忠告に従い、会議室をあとにした。
「いいかい、あの悪魔は学校が創立して、しばらくしてから現れた奴なんだ。この学校の悪魔は、お前の教室に住み着いちまった奴から力を貰ってやってきている。要するに、お前のクラスにいる悪魔は、この学校の悪魔の親玉だ。悪魔はオレら魔族にも危険な存在なんだ。あんまりにも、酷いことを奴らがしてくれたことがあってね。オレらが頑張って二十年間の封印を掛けることができた。んで、今日が二十年目。だから、悪魔の封印が解けて、生憎あんたのクラスに住み着いちゃった。でも、さっきも言ったとおり、悪魔はオレらにとっていいもんじゃねーんだ。だから、あんたに倒して貰おうってわけだ。実をいうとな……この学校に、伝説なんて一切ない。お前が初めてだからな。だが、協力するぜ。鬱陶しい担任とかなら、うちの精鋭部隊が一蹴するしな。お前は悪魔退治に専念してくれ。悪魔だが、物理攻撃は一切効かないし、魔法も効かない。互角に戦えるのは一つだけだ。あんたにはわかるだろ。元竜使いさん」
そう、私は前の学校で竜使いをやっていた。その名の通り、竜を使って戦うという事が本当にあった前の学校では、竜を人に慣らす。いわば調教係みたいなのが存在した。竜には様々な種類があるが、中でも憧れの中の憧れ、ホワイトドラゴンは、調教とは関係なく、

運命の者のもとに現れ行動を共にする。パートナーというに近い。そのドラゴンには、霊的な特殊能力があるが、くわしいことはわかっていない。しかし、その特殊能力が並み外れた力であることは確かで、他の力ではどうにもならない事でも、ホワイトドラゴンの力なら、なんとかなる事だってたくさんある。今回がそのいい例と言っていいだろう。しかし、ホワイトドラゴンは望んで出てくるものではない。

「簡単さ。ホワイトドラゴンなら、君の中に潜んでいる」

「次、四組、もういいそうです」

精鋭部隊編成

「じゃあ、女子はこっち並んでー」

私は、暑苦しい先生の横から解放され、せいせいしていた。

しかし、女子のみでの行動。百たたきが予想される。これはうまく誘導しなければ、何もわかってない奴が騒ぎだす。そして、言うのは大概間違った事だ。で、大混乱。

「なにボーッとしてるんやて。さっさと行ってよ」

出ました馬鹿一号。あんたの友達がトイレ行って出発できないんでしょーが！

まあ、私の分際じゃあ何も言えませんけど。

「ねえねえ、何やるの？」

ウィニー。純粋な黒の髪。ポニーテールにしてある。同じ小学校だったし、結構話すことも多かった。

でも、今話しかけるでない。しかも、何やるか位わかってんだろ。

軽ーく目線で伝えて、後ろを振り返る。トイレの長い奴だ。まだ来ない。

「あたしどこー？」

「こっち、こっちフェルカ」

遅刻人に大歓迎。あたしが遅刻してきた時と全く様子がちがいます。

という訳で、最初に来たのは柔剣道場と呼ばれる、プチ体育館のような場所。迷わずテキパキやったので、今のところクレームはでてない。

「礼、お願いします」

私を皆を座らせて、書類を渡す。

＊＊＊＊＊＊＊

視力検査、体重測定、座高は問題なく進み、柔剣道場で最後の検査。身長測定だ。

担当の先生は、この学校の教科担任をもつ先生で唯一の女の人。すごく人柄が良さそうだった。

片に嵌った礼をして、座らせる。

「おお、完璧やねえ。誰え、メリサさんか。頑張っとるね」

ウザくね。という声が後ろからざわめく。マズイ。この状況、確実にマズイ。

「遅れてごめんしゃーい」

田舎くせえ言い方。あの白い鳥か。

「精鋭部隊つれて来たぜ。自分でうまく編成してくれ。おい野郎ども、ちょいっとやっちまえ！」

どこの不良グループですか。

そんな余裕なツッコミができたのも、白い鳥のお陰だった。彼（？）の精鋭部隊は催眠術をかけてウザくねの連発を止めてくれた。

「んじゃねー」

うえー。放ったらかしになったよ。催眠術って覚めたあとに倍返しになるっていうの、お決まりだよー。

私は悲しみに明け暮れる日々を、無意識に想像してしまった。

選挙

入学式から数日。メルバーグは朝の会である事を発表した。
「えー先輩から聞いた人はわかると思いますが、来週から選挙が始まります。そこで、皆さんには今日、え立候補宣言をしてもらいたと思います」
教室のあちこちから話し声が聞こえる。まだクラスが始まったばかりで、ばか騒ぎにはならない。見事な猫かぶり、と拍手したい。まぁ私も例外でないが。
「係の種類は、大きくわけて四部会となっています。班長会、部会、教科係会、諸係会です。で、わかりやすいようにプリントにまとめたので、見てください」
最初から配れよ。
「えー全員に回りましたか？」
小学一年生のように元気一杯「はい」という奴らを忘れて、私はプリントを読んだ。
一番上が生徒会となっている。いわえる学校のトップ集団。その下からは、三本の線が引かれていた。「議員・進路委員・学習委員」で、同じ高さに並ぶ。
議員の説明は、生徒会と学級のパイプライン。
進路委員はいわえる学級委員のようだ。
学習委員は、学習活動を活気づけ……。とやけに説明がくわしい。どうも、授業中に寝てしまいやすい私には向いていない係のようだ。
「あんた、悪魔の事は考えてんのか？」
びっくりした。机に住む黄色い子犬精霊が、プリントをすり抜けている。のは当たり前か。
確かに、悪魔の事は忘れていた。というより、最近見ていない。
「うまーく姿を隠すから悪魔なんだぜ」

偉そうに腕組みしているのがむかつくが、言っている事は正しい。
「それも踏まえて係を選ぶんだな」
奴は言いたい事だけ言って消えた。いや逃げた。
「進路、議員、学習委員は、学級のリーダーになる人達です。この学校の選挙は、事実をもとに係になる人を選びます。例えばねえ、メリサさんとかは身体測定でリーダーシップを……」
私は決めた。やってやろうじゃねぇか学級のリーダー。そうすれば、学校で落ちこぼれない。あの六年生の時の担任が言った事、全部ひっくり返してやる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6683r/

教室に住み着いた悪魔

2011年11月8日22時10分発行